

随想

父の最期を想う

子供を思う親の心

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

東京新聞の三月二十四日(朝刊)の投稿コラム《あけくれ》が目をつづられている。七七歳の女性の思いが以下に引用する。

病室の合唱――

父が死んで二十三年がたった。息を引き取る一カ月ほど前の、ドラマの一場面のような父の病室の風景を忘れることはない。

ベッドの上にいた父の口から声が出ていた。父は鉛筆を縦に唇に当てるように持ち、なんと田畑義夫の「かえり船」を歌っているではないか。わたしが「お父ちゃん、歌、歌ってるよ」と声を上げると、気付いた病室の見舞い客たちが

一人、また一人と「かえり船」を歌い始めた。七、八人いた病室は声で満たされ、父に対する「頑張れ！頑張れ！」の気持ちがあふれたように思えた。「生きて」と願う荘厳な空気が張り詰めた病室の様子は、今も脳裏に焼き付いている。

十歳の時に母を亡くしていた私は、父の逝去でどうとう両親を失ったんだと心が空っぽになる思いを味わったのだ。こんな年になっても、まだ親に甘えたい、頼りたいという気持ちがある自分に驚いている。

この方は先に紹介したように七七歳で、著者と同世代であり、著者が父を亡くしたときを思い

起こしていた。

著者の父は明治四十四年生まれで、平成十二年に亡くなった。明治生まれの人の頑健さの例に漏れず、健康そのもので八八歳まで満州鉄道OBの会をまとめる等、精力的に活躍する傍ら、三重にある三つの菩提寺に分散されていた先祖の墓を一所所に祀り直す作業を進めていた。父なりの終活の一環であったのだらう。

在住が大阪府北部で、三重での活動のため、月に何度も通っていたが、健康に自信がありすぎたのか歳も顧みず、止めるのも聞かず自宅から電車駅までバスを使っていた。

幾度目かの往路、揺れるバスで転び右足を骨折して、入院す

ついた。帰宅したのは午後一時ころか！遅めの就寝で寝入ったころ、突然の電話で起こされた。病院からである。先ほどまずまずの状況であったのに、血圧が高い方で四〇とのこと。危篤状態である。時計を見ると午前四時半。まだ始発には一時間近くある。急いで身支度をして京都に向けて出発した。東京から京都までほぼ二時間、東京駅までと、京都から病院までの時間を合わせれば四時間近くもかかる。なにせ血圧が四〇であるから「これは、死に目に会えぬか!」と覚悟しながらの急ぎ旅である。

ようやく病院に着いたのは九時半。間に合わぬ覚悟で病室へ入ると、姉と三重県に在住の弟がすでに来ている。

ベッドに目を移すと《心電図が僅かに波打っている》。血圧は三七〇四〇。医師がそばで、「ダメかと思ったのですが、心臓が強いですね!」と著者へ語り掛けた。

挨拶もそこそこに、父に向っ

た。父は先にご紹介したように七七歳で、著者と同世代であり、著者が父を亡くしたときを思い

る羽目になってしまった。入院後二週余り過ぎたころ、見舞いに行くとき、

「何とか立って、松葉づえを使えば歩けるようになった」と明るく話していた。

それから間もなく、近くに住む姉から「左足を折った」との連絡。

何でも自分でやらねば気がすまぬ父は、朝の洗顔と歯磨きを自分で…と無理をして、病院の洗面所で転び、反対側の足を折ったのだという。

改めて見舞うと、流石にバツが悪そうに「失敗した!」等と苦笑いをしていた。

老人の骨折はしばしば深刻な結果を生む。

本来なら二週間ほどで済む入院が倍に延びた。三週目を越えた頃からしつこい咳が出て、呼吸が苦しくなった。

担当の若い医者は《五年前に手術した胃癌が肺に転移したため》だという。

著者の見舞いは仕事の合間を見てのことなので隔週が精一杯であり、経過の詳細を直接知ることがかなわない。五年も経過した胃癌がこのタイミングでそれも急に転移巣として深刻化するとは思えない。

無理を言っエクسس線写真を見せてもらい、説明を受けた。かの若い医者は肺に映る影を示しながら、

「この部分が広がっている肺腫部分で…」

等と説明してくれる。専門家の説明に異を唱えるのも失礼と思い、控えめに、「それで、点滴には抗生物質は入れて頂いているのでしょうか?」と尋ねた。

エクسس線写真の影は著者に

は肺炎像とも見えたからである。

しかし、その医者は、「いいえ!抗生物質は入れていません!」との答え。

骨折から肺炎という経過を考えると、父は当時すでに八九歳を越えていたため、寿命に不足はない。

それでも幾ばくかの治療効果を期待して、点滴への抗生物質添加をお願いして、経過を見ることにした。

残念ながら、予後はよろしくなく、日に日に弱ってくるのが身につまされる。

ある日、見舞いに行くといつもより元気で、著者の顔を見ると、

「これ、私の息子!!」

と担当の院長に改めて紹介した(いくばくか自慢げであったことが何となく面はゆかった)。

その日は小康状態で、午後しばらく昔話を交わして過ごした。小康状態を確認し、少々の安心を持って、東京への帰路へ

て言った。

「決めたことを姉や弟に話すね!!」

これまでの見舞いの際に父と二人だけで語り合っていた財産分与や今後のことについて書き記したものを、初めて姉と弟に父の言葉として伝えた。そして父に語り掛けた。

「これでいいんだね!」それまで、血圧四〇を境にしながら、ゆらゆらと揺れていた心電図線が、著者の言葉が終わるや否や、スーと糸を引くように下がりに、心臓が止まったのである。

壮年の頃より、姉や弟の将来を心配し続けていた父が、ほとんど止まりそうな心臓で、それでも著者の到着を待ち、遺言の経過を確認するように亡くなったこと。

このシーン、著者の人生で《親の子供を思う心》を映すものとして、七五歳になる今でも忘れられない。